

冬が凍りつく町

text by Shinji Ishii
文いしいしんじ

きのう松本の本郷先生から、八百源のわさび漬けが届いた。京都の最低気温はマイナス三度、調べてみると、松本はマイナス十度だった。

この連載で、いまだに松本のことを書いていないのを知って、少なからず驚いた。現在京都に住んでいるが、僕と園子さんはその前、信州の松本に五年間住んでいた。そして、住んでいないとわからない様なことを、学び、思い知り、教えられた。信州の山から、水から、空気から、なにより「寒さ」から。

三浦半島の温暖な港町、三崎に、僕がひとり住まいしていた頃、園子さんは東京での仕事を辞め、信州の染織作家、本郷先生に弟子入りすることになった。その後、二年間ひとりで住んだ彼女と、海を舞台にした長編小説を書きあげた僕は、二〇〇四年夏に入籍し、世間でいうところの夫婦となった。

移る。正面、真後ろ。戸惑う暇もなかった。僕は自分がどちら向きに歩いているのかまったく見当がなくなってしまう。

はるか先に、ぼんやりと光がみえる。街灯か、ひよっとして、クルマのヘッドライトかもしれない。足を速める。光はゆっくりと着実に近づいてくる。川音は消え、僕の呼吸音だけが大きく耳についた。どれほど時間が経ったかはわからない。いつのまにか僕は、路上の、その光り輝くものを見下ろしていた。

それは狐だった。わずかに口をあげ、舌を少し垂らして、目はかっと見開いていた。体毛に付着した水が銀色に輝いていた。狐にかぎらず、僕は、動物の凍死体を目の当たりにするのは初めてだった。ゆっくり膝を曲げて座り、僕は頭を垂れ、胸の前で足のひらを合わせた。

その瞬間、どっと突風が吹いた。濃密だった霧がみるみる取りはらわれていく。僕は呆然と立ちつくした。目の前に、凍りついた滝のように、二階への鉄階段がのびていた。僕は、きのう引越してきた、松本の家の前に立っていたのだ。

せつかく夫婦になつて離ればなれに暮らすのは不自然だ。園子さんは毎日、先生の工房に通わなければならないが、いつぼう僕は、どこに移ったって書くものにそう変わりはない(とそのときは思っていた)。三崎の家はキーブしたまま、僕は暮らしの拠点を松本に移すことにした。持っていけるだけの簡単な荷物を携え、十月のある日、僕は、港町から山間の町へ、引越したのだ。

松本市郊外、ぶどう畑の真ん中に建つ二階建ての家だった。一階はまるまる、旋盤や道具、木材が置かれた「工場」だ。木工会社を営む大家さんは、息子さん夫婦のいる千葉へ行き、五年後またここに戻ってくる。外壁についた鉄の外階段をのぼっていくと、工場の屋根の上に、軍艦のブリッジみたいな居住スペースが載っている。内部は呆れるくらい空間が広い。玄関からつづく廊下だけでも四人家族くらい住めそうだ。

その冬は、地元のひとにいわせれば、ひさびさに来たほんものの冬だった。朝起きると、窓の内側の水滴がぎっしり凍り、家のなかなのに、棧の下に数本、十センチくらいのつららができていた。

いまでも覚えている。明け方、なんともいえない予感をおぼえて目ざめ、ひとり布団から起きだした。凍てつく闇はコーヒーズリーのようにどろりと分厚かった。トイレにいてふと、お風呂のドアをあけてみた。プラスチックの椅子、たらい、石けん箱、そういうものらすべてが、じゅんさいのように、ひとつながりの氷のなかに閉じ込められていた。僕は黙って布団に戻った。いったいなんでい

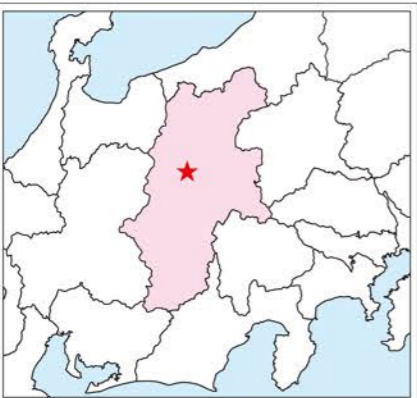
はじめての夜は大風だった。鉄筋コンクリートの家のみしみしと軋んだ。布団から高い天井を見あげながら僕はふと「底」にいる感覚にとらわれた。なんの「底」だか、まだ考えもついでいなかったのだが。

翌朝、外には、牛乳を流したような霧が出ていた。「散歩、いってくる」といい残し、僕は初めての松本散策に乗りだした。なにもみえはしないけれど、社の森のむこうに、薄川という小川が流れている。その川音を右手にききながら、上流にのぼっていき、そしてまた、同じ道を帰ってくればよい。

川沿いの道を歩きだした。濃霧は出迎えるようにうずまきながら僕を取り巻いた。歩いていくうち僕は、妙なことに気づいた。薄川のせせらぎの音が、いつの間にか、自分より左からきこえてくる。橋なんて一本も渡っていないのに。今度はまた右に、ふたたび左に

うところに引越してしまったんだ。そう思いながら天井を見あげた瞬間、自分がどこにいるか、ようやくと理解した。僕と園子さんはいま、「寒さの底」に横たわり、闇から見下ろされているのだ。

ものすごい冬だった。マイナス十五度が最低だった。山や道路だけでない、冬そのものが凍りつく、二〇〇四年の、松本の冬だった。



長野県松本市

面積：978.47km²
総人口：242,065人(推計人口 2017年10月1日)
人口密度：247人/km²
市の木：あかまつ
市の花：れんげつつじ
市制施行：1907年5月1日



Profile

1966年大阪生まれ。京都在住。著書に小説「ぶらんこ乗り」「麦ふみクーツエ」「ポーの話」「みずうみ」「四とそれ以上の国」など、エッセイ「人生を救え!」(町田康共著)「熊にみえて熊じゃない」「選い足の話」、絵本に「赤ずきん」(ほしよりこ絵)など多数。

